仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑪

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

鳩摩羅什の翻訳観

釈迦が説いた世俗否定の教えは、中国での受容過程で現世主義的に変容していった。鳩摩羅什の翻訳はその変容に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

彼の翻訳は創作であるとしばしば指摘される。中村元は「改変を施しているかあるいは彼自身の思想をもちこんでいる」（中村，1995:181）とし、在家の維摩居士を主人公にして在家仏教の優位性を説く大乗仏典『維摩経』の中の一文に関して次のように指摘している。

> チベット訳には、
> 「無明の汚れが尽きるがゆえに老死にいたるまでの汚れが尽きるがゆえに、それは縁起の必要である。如実にさとるがゆえに、それは一切の煩悩を死滅させる必要である。」
> とあるが、この文章について見るかぎり、チベット訳文は現世的世俗的なものに対して否定的である。
> ところがクマーラジーヴァの訳はわれわれの生死輪廻のすがたを肯定している。すなわち「縁起がすなわち道場である。なんとなれば、無明から老死に至るまでの十二の支分が尽きることが無いから、諸の煩悩がすなわち道場である。なんとなれば、そこにおいては如実のすがたを知るが故に」としるしている。（中村，1995:182）

このように鳩摩羅什は、諸々の煩悩によってこの世で迷う姿は悟りにつながるとし、それを肯定的に捉え、さらには現実的な迷いの世界をも肯定しようとしている。

またチベット訳で「王の快楽と主権とに対する欲を退けるが故に、諸王子の中でもすべての王子によって敬われる。」となる一文を、鳩摩羅什は「忠孝を示すがゆえに、諸王子の中でもすべての王子によって敬われる。」としている（中村，1995:190）。チベット訳は欲望の否定を強調しているが、鳩摩羅什は中国的な「忠孝」という人倫関係における義務の肯定を強調している。『維摩経』のサンスクリット原文は残存していないため、原文に忠実であるとされるチベット訳と比較すると、鳩摩羅什訳には明らかに改変がみられる。

サンスクリット語に関して母語話者同様の感性を備えていた鳩摩羅什は、サンスクリット原文の理解が先行するあまり、自身の翻訳についてはかなり悲観的であったことが知られている。

> 天竺の國俗は甚だ文製を重んじ、其の宮商體韻は入絃を以て善しとす。凡そ國王に覲ゆるには必ず德を讃ずることあり。見佛の儀は歌歎を以て貴しとなす。經中の偈頌は皆その式なり。但し梵を改めて秦となさば、その藻蔚を失す。大意を得と雖も殊に文體を隔つ。飯を噛んで人に與ふるが如し。徒らに味を失するのみに非ず。乃ち嘔噦せしむるなり。（横超，1958:16）

鳩摩羅什はこのように述べ、サンスクリット原文の偈頌など、その文体が有する美的感覚は変換不可能であり、翻訳するとそれはご飯を咀嚼して人に与えるかのごときで、味もなく嘔吐を催すとしている。また彼は「語現はれて理沈み、事近くして旨遠し」（横超，1958:16-17）とも述べ、巧みに表現してもかえって真理を覆ったり、直訳しても原文の本旨から遠ざかったりすると指摘した。

彼は翻訳不可能論を前提として、あくまで大意の通達を旨とし、たとえ原文と異なっても、受容されうるものを伝えることに専念していたと考えられる。実際、彼は『摩訶般若波羅蜜経』の注釈『大智度論』の翻訳の際、中国では煩瑣よりも簡素が好まれるとの理由から、原文の三分の二を削除して百巻に翻訳した（木村，1997:254）。彼は漢語の伝統を重視する漢人沙門の意見を採用し、より洗練された漢訳を生み出そうとした。

上述の鳩摩羅什の指摘は、翻訳の限界を一番近くで体感する翻訳者がしばしば味わう感覚である。原文の理解と二言語の能力が卓越すればするほど、克服不可能な差異が可視的になる。翻訳を生み出しつつも、嘔吐を催すとしてそれを忌み嫌う葛藤は、翻訳者の宿命でもある。

さて、鳩摩羅什は訳経史に功績を残した偉大な訳経僧としての顔とともに、実は破戒僧としての顔も併せ持っていた。

前秦の将軍呂光の捕虜となった彼は、不遇の時を過ごす中で呂光に弄ばれることがしばしばあった。ある時、彼は酒を飲まされ密室に女性とともに幽閉されたという（丘山，2010:165）。その結果、やむなく女性と通じ、鳩摩羅什は破戒僧の烙印を押されることになった。それはちょうど出家者であった彼の父、鳩摩羅炎が亀茲国で王女に請われ破戒して結婚した姿にも重なる。さらに鳩摩羅什は授かった子供を王との博戯により殺害されるという悲惨も味わっている。受戒していながら皮肉にも自らの行いによって父と同じく破戒僧となり、世俗的な生活の中で辛苦と失意を経験した境遇と、その渦中において醸成された信仰心が、より多くの衆生救済を説く大乗仏教へと彼を駆り立てたのかもしれない。

『出三蔵記集』巻十四鳩摩羅什伝には、「譬えば臭泥の中に蓮華を生ずるがごとし。但だ蓮華を採りて、臭泥を取ること勿れ」という彼の言葉が残されている。蓮華を指す語はサンスクリット語でいくつかあるが、そのうちの一つ Pankajam は Panka（泥）と Jam（誕生）の複合語で、泥の中から生まれるにも拘らず泥に沈むことなく、一切泥に汚されることもない清らかな蓮華を比喩的に意味する。彼は破戒僧としての自己を臭泥に譬え、漢訳の過程で自身が苦悩を経て紡ぎ出した訳文を、臭泥から生まれる美しい蓮華に譬えている。破戒僧の汚名を背負いつつ、大乗に救いを求めて仏典漢訳に身命を賭した彼の悲哀と敬虔な信仰心がその言葉に滲み出ている。彼にとって翻訳とは、伝道のための営みであると同時に、自己の救いに直結する信仰実践だったのではないか。当然ながら彼の翻訳観は、自身の経験と思想に基盤を持っており、失意と苦悩によって醸成された自身の信仰から大きく影響を受けていたと思われる。

宗教文献の翻訳の場合、翻訳者の信仰は翻訳に大きな影響を及ぼす。時として原文よりも影響力を持つ「聖なる言葉」の訳文には、原文に内包された真理の蘇生に挑む翻訳者の求道の精神と信仰の息吹が宿っているといえよう。

［引用文献］

横超慧日「鳩摩羅什の翻訳」『大谷学報』37 巻 4 号通号 136 号、1958 年。
丘山新「鳩摩羅什の破戒と訳業をめぐって」『新アジア仏教史 06 仏教の東伝と受容』佼成出版社、2010 年。
木村宣彰「羅什と玄奘」高崎直道他編『仏教の東漸　東アジアの仏教思想 I』春秋社、1997 年。
中村元『中村元選集第 21 巻　大乗仏教の思想』春秋社、1995 年。